



Title	“A Sort of Composite Soul, the Soul of Command” : Joseph Conrad, The Shadow-Line における分身関係の表象
Author(s)	田中, 和也
Citation	Osaka Literary Review. 2022, 60, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88498
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

“A Sort of Composite Soul, the Soul of Command”: Joseph Conrad, *The Shadow-Line* における分身関係の表象

田中 和也

序論

Joseph Conrad の作品においては、“Heart of Darkness”(1899) のような船乗りを描いた前期作品や、*Nostromo* (1904)、*The Secret Agent* (1907) などの中期の政治小説が、主に人口に膾炙している。その一方で、F. R. Leavis や Thomas Moser、Albert J. Guerard のような初期批評の大家たちは、*Chance* (1913) 以降の後期小説は、彼の才能衰退の証と評価した。この後期作品への低評価は近年見直されつつあるが¹、その一方で 1917 年出版の *The Shadow-Line* には一貫して例外的に高評価が下されてきた。この理由には、本作品が Conrad が得意とした海の世界を描いていることがある。またこの小説には、彼自身が船長として勤務した際に、航海が一筋縄ではいかなかった際の経験が生かされていて、そのような自伝性も高評価につながってきた²。事実、Conrad 自身の経験をなぞるように、本小説の匿名の語り手は折よく船長職を得るが、その航路は風や船員の間の病が理由で、決して円滑には進まない。だが最終的には彼は部下の船員たちと協力をして、何とか中継地点であるシンガポールにたどり着く。*The Shadow-Line* は、Conrad 自身や彼の前期作品が重視してきた、船員間の連帯感や義務感を描いているのである。なおかつ、それらを経て主人公が船員として技量を向上させる姿が表象されるのである。ゆえに本小説は、ビルドゥングスロマンだと解釈されることが多い (Capoferro 21-22; Erdinast-Vulcan 127)。

だがこの小説は、語り手が船長として「成長」していく姿を、必ずしも

素朴に描いているわけではない。たとえば作品の第1章では、語り手が船長職を得るまでの過程が描かれる。だが、彼は周囲の状況を読めないがために容易には船長になれず、作品は航海という本題には中々入らない。だがこの遅延された出だしのおかげで、本作品の語りは決してナイーブなものではないことや、語り手の信頼性に関して、読者は留意せざるを得なくなる（山本 95-103）。このような遅延は、本小説の語りにおいて時間というものを自意識的に用いていることとも響き合う。ゆえに *The Shadow-Line* の語りには、語り手が自身の成長を読者に印象付けるための技法が巧みに駆使されていることが、意味づけられるのである³。

このような自意識的な物語言説においては、登場人物間の分身関係は考察に値する。Conrad 作品において、分身のモチーフはしばしば用いられる。例えば *Lord Jim* (1900) では、主人公の Jim が後半の舞台 Patusan に上陸する過程を、悪漢 Gentleman Brown がそのまま辿る。あるいは、*The Secret Agent* (1907) 後半で、Winnie が夫 Adolf を殺害するときに、彼女の顔は亡くなった弟 Stevie に似ていると描写される。だが *The Shadow-Line* に関連して最も注目には値するのは、“The Secret Sharer” (1910) である。この作品では *The Shadow-Line* と同じく、語り手は匿名の新米の船長であり、なおかつ Conrad の船長経験に基づいている。語り手は、他船から逃げてきた Leggatt という船乗りと出会う。Leggatt は、嵐の船上で同僚を誤って殺してしまい、語り手の船に逃げてきたのである。語り手は、Leggatt を自分の“double”だとたびたび描写して肩入れし、Leggatt を匿うことを通じて、逆説的に船長としての自覚を強めていく。また、Leggatt は幽霊のようだと幾度も描写されるが、*The Shadow-Line* では語り手の乗る船は先代の船長が幽霊となってとり憑いていると言及される。いわば、物語の素材、内容、語りの構造において、*The Shadow-Line* と“The Secret Sharer”は双子の関係にある。

しかし、“The Secret Sharer”に関しては分身関係への論考が豊富にある

が、*The Shadow-Line* に関しては深掘した論考は少ない。たとえば、Guerard は本作品と“The Secret Sharer”との類似性を指摘しつつも、*The Shadow-Line* では分身関係は「二人ではなくて三人に分かれている」(“the division of the soul is into three not two”)と述べて、語り手、一等航海士 Burns、料理人かつ給仕係の Ransome の名に言及するにとどまっている(32)。あるいは Mark Ellis Thomas は、語り手とその前任の船長との関係を考察している。だが Thomas は、語り手が前任者との「分身に抵抗する」(“resists the doubling”)ことに注目し(230)、彼が前任者の呪いという迷信にいかにかたがたに抗うのかに注力している。近年の Nidesh Lawtoo の論考でも、分身関係については、『通過儀礼』の変革的経験(“transformative experiences of ‘initiation’”)のための「模範的な別人格との、ミメシ的なやりとりの不思議な形式」(“mysterious forms of mimetic communication with exemplary alter egos”)と述べるにとどまっている(96)。

そこで本論稿では、語り手との分身関係を考えるにあたり、三人の人物に注目する。一人目の人物は一等航海士にして病床に伏す Burns、二人目は料理人かつ給仕係として語り手を心身で支える Ransome である。三人目は、語り手を船長職に導きつつ、自身も優秀な船長である Giles である。三者への考察によって、語り手の視点の限界が意味づけられる。それにより、本作品が主人公の「成長」を読者に印象付けようとしつつも、実際にはその成長ぶりの限界を顕在化していることを、主張したい。

1. Burns との関係

まずは、船長である語り手と職務上で密接な関係にある、一等航海士の Burns について考察する。彼は語り手と同年代の若者で、熱病にかかりつつも航路に同行する。語り手の見たてによれば、そもそも Burns は前任の船長を継いで「臨時の船長職」(“temporary command”)を得ようとしていたが、語り手が着任したことで果たせずに、フラストレーションを抱

いている (52)。さらに Burns は、前任の船長が死後に幽霊となって船にとり憑いているせいで、船が風にあたり、船員たちが熱病に悩まされたりするのだと、たびたび語り手に話す。作品終盤では、Burns は自身も熱病に悩む中なのに、雨の中甲板に出てきて大笑いをする。その笑いが「悪霊払いの効力」(“exorcising virtue”)をもっていたかの如く、その後の航路は円滑になり (103)、彼の言葉も声音も“sensible”(102)なものに変わる。このように Burns が幽霊となった船長に関わりなおかつそれをおさめたかのように表象される姿からは、ゴシック文学の伝統と響き合うものを読みこめる (Capoferro 33-34)。いわば、Burns は作品中の不合理や超常現象めいた事態、それらへの解決を体現した人物として、語り手に描写されている。

だが、Burns を一概に非合理的なだけの存在だと鵜呑みすれば、語り手の印象に誘導されてしまっている。実際に、前任の船長が愛人を持ったり夜中にバイオリンを弾いたりするなどの奇行で船員を混乱させているときにも、Burns は職務を遂行していた。さらには船長が船上で亡くなった後、Burns は船長代理として船を導き、無事に近隣の街に寄港させている (52)。この点から、船乗りとしての彼の技量と乗員からの信頼は、確かなものだとわかる。さらには Burns は語り手と航海する際、熱病や前任船長への執着があっても、航路に関しては理性的である。船が遅滞として進まないために、語り手は the Gulf of Siam において航路を西に向けることを考える。これに対して Burns は、『『死んだ船長に向き合え』 (“facing that old ruffian”)と妄言めいたことを述べつつも、語り手に反対する (84)。実は Burns のこの判断は、ベテラン船長の Giles が語り手に与えていた助言と符合する (Watt 503)。以上のように Burns は作品中盤では、語り手によって先代船長への奇妙なこだわりが強調されているが、その裏で船員として確かな腕と見識を維持している。Burns の技量は、自分が熱病でありながらも船に乗りたいと、語り手に懇願したときの描写とも通じ

る。その懇願時に Burns は「『あなたも私も船員同士です』」(“You and I are sailors”)と船乗りの連帯感に訴えて、語り手の心を動かす。彼の言葉の重みも自身の職業意識ゆえなのである (57-58)。

上記のような Burns の船員経験や技量は、語り手という若い新人船長の自己賛美のナラティブにおいて、ほころびがあることを示す物語装置となる。彼ら二人は年の若く、技量と心ばえのある船員という点では実は共通していて、分身とも言える。だが、その実 Burns は、語り手の未熟さを照射する役割も果たす。特筆すべきは、そのような Burns の役割は、語り手と彼の邂逅場面から暗示されていることである。語り手は船長職の任命を受けた際、自分が魔法にかかり (“by enchantment”)、おとぎ話 (“a fairy tale”) の人物になったかのように感じている (33)。このいささか子どもじみた有頂天のもとで、語り手は船に乗る。乗船後すぐに船長室に行った際に、彼はおもむろに肘掛け椅子に座る。語り手はその椅子には歴代の船長が座ったこと (“A succession of men had sat in that chair”) に思いをはせて悦に入る。その際に彼は鏡 (“a wide looking-glass in an ormolu frame”) に映る自分を見つつ、その鏡越しに一等航海士である Burns がやってくるのに気づき、我に返る (43-44)。いうなれば Burns は登場時点からして、新任船長である語り手の恍惚を乱す存在として、描写されている。

ここで留意されるべきは、語り手がそのように乱されたと感じてしまう際の鏡と時間の描写である。鏡は自己認知を促す道具ではあるが、語り手が鏡像を見て Burns に居心地悪さを抱くときに、彼はどれほどの間自分がうっとりしていたのかと思案する。語り手は自分が船長室に入って二分も経っていないはずだと考え、なおかつ時計の分針はほとんど動いていない (“its [the clock's] long hand had hardly moved”)。ゆえに語り手は、Burns が「自分が無防備に白昼夢にある姿」 (“my unguarded day-dreaming state”) を見たのは「数瞬の間」 (“a mere fraction of a minute”) だろうと

推察する。この状況を裏返すと、数瞬という客観的に計量可能でかつごく短い時間の間に、語り手は主観的な自己像や歴代の船長たちを、事細かに想像しているのである。しかも、船長たちの有り様を君主制に大げさにたとえ、自分はその最新の代表者 (“this latest representative of what for all intents and purposes was a dynasty”) なのだと空想する (44)。さらには、君主制という身分制度を比喻で用いつつも、船乗りの伝統は血統ではなくて経験や義務に基づく (“continuous not in blood, indeed, but in its experience, in its training, in its conception of duty”) という (44)、矛盾した考えを示している (Lawtoo 96-97)。このように、語り手の自己像は大言壮語に彩られ、それがしかも時間という計量的指標ではごくわずかな間で起こっていることに、彼の理想の脆さが見てとれる。

語り手の自己像を考えるに当たっては、船長室の鏡自体も注目に値する。鏡はこの場面で、語り手を自己探求に導いている。語り手が船長になりはじめた己を鏡像を通して確認する姿には、ジャック・ラカンの鏡像段階と共鳴するものがある (Lawtoo 110)。だがその当の鏡自体は、「模造金箔のフレームに入っている」 (“in an ormolu frame”) ものである。いうなれば、ごくありふれた「模造品」に縁取られた道具を経由して、語り手は前述のように、大仰に自分の船長職を考えている。この道具立ては、語り手の理想と現実とを巧みに対比させている。ゆえに、彼の自己意識や船長職に有頂天になる姿に危うさが最初から潜んでいるということが、示唆されているのである。

さらには Burns の人物像を考えると、語り手の自己像が地に足が付いていないことが、なおさら如実になる。Burns に関しては前述のように船員としての技量があると、この邂逅ののちに明白となる。ましてや、Burns は語り手よりも数歳 (“several years”) ほど年上に見えるという。こうした外見やそこから推し量れる船員経験の幾分の差が暗示されつつも、語り手は「自分は若さを置き去りにした」 (“I became aware of what I had left

already behind me—my youth.”)と、「自ら意識する」(“self-conscious”)のである(45)。語り手が自分の成熟ぶりを「自意識的」に考えないといけない点は、それを支えにして彼自身が何とか自分の威厳を保たねばならぬということであり、自らの未熟さを逆照射する。

語り手の未熟さや思い込みの激しさがBurnsによって明白となるのは、熱病の特効薬であるキニーネが、船には無いと語り手が気づく場面でも同様である。語り手はキニーネが別の粉末とすり替えられていると気づいたときに、一等航海士であるBurnsのもとに真っ先に赴く。その際に、Burnsがハサミを手にしているのを見て、彼が喉を突こうとしている(“to jab at his throat”)と思い込む。だが実際には、Burnsはひげの手入れをおこなっていたに過ぎない(74)。この後、語り手がとり乱す一方で、Burnsはむしろ冷静(“composed”)である。さらには、語り手が自責の念を口にする際に、Burnsはその考えは愚かだとたしなめる(“That’s very foolish, sir.”)。いわば、語り手がハサミについて思い込むという、コミカルでさえある描写のあとで、彼は同年代の船員である当のBurnsに気遣われているのである(76; 78)。Burnsの落ち着きは、語り手がキニーネさえあればその“magical”な力で熱病は解決すると、ナイーブに信じていたこととは対照的である(72)。

ただし、Burnsと若手船長である語り手との対比は、語り手の人格という彼個人の要素をあぶり出すためにとどまらない。二人の対比は、船の上の世界の特質も鋭利に描く役割をも果たす。奇しくも語り手自身が、肘掛け椅子に座りだしたときに、歴代の船長たちの魂がそこに存在しており、それは「ある種の合成された魂で、指揮の魂」(“a sort of *composite* soul, the soul of command”)なのだと描写する(43; my italics)。このことは歴代の船長間の連綿としたつながりを示す。だがそれのみならず、多くの船員たちが連携して初めて“command”を果たせて操船が可能だということを踏まえると、より“social”なニュアンスも見いだせる(Lawtoo 112-13)。事実、

先述のように、語り手がキニーネ不足で慌てふためくときに、Burns が彼をたしなめる様子も“composed”だと描写される (76; my italics)。いわば Burns が冷静であることや、その冷静さが語り手に印象付けられかつ分かち合われるおかげで、語り手は幾分落ち着きをとり戻しているのである。

注目すべきは、その“composite”な構成員の一人で、船長と直接やりとりをし、最悪の場合は船長の代理をしようのが、Burns が務める一等航海士の役割であるということである。現に Burns は、先代船長の死後で示したように、そのための技量と心がけを確かに有している。語り手は、Burns に当初は不快感を覚え、嵐の後にようやく彼のことを認める。前述のように、Burns と語り手は、若い有能な船員という点で、分身関係だと言える。Burns を巡る拒否から受容へと至るプロセスからは、語り手自身が己の未熟さと向き合えるようになっていく道筋と、対位法的な関係にある。以上のように、語り手には望まれていない分身関係を読み解くと、彼の語りのためらいやほころびが見えてくるのである。これは、Burns の描写に関して幽霊などのゴシック的な描写があるという語りを、括弧にくくるものにもなっている。

2. Ransome との関係

前節のように語り手は、Burns に対しては同族嫌悪じみた苦手意識を抱いている。これとは対照的に、語り手は別の若い船員である Ransome に対しては、大きな好感を抱いて接している。Ransome はもともと料理人だが、給仕係が熱病で倒れたことを受けて、ダブルワークをこなすことを志願する。Burns が「この船で最良の船員」(“the best seaman in the ship”)と評するように (56)、彼は船員として高い資質を持つ。しかし Ransome は心臓疾患のために過度な労働は出来ず、料理人となっていた。語り手の航海は Ransome という精神的支え無しにはあり得ず、Ransome はまさに語り手の精神や指揮に“composite”で、二人は分身にあたる存在で

あった。だが、Ransome は最終的には心臓の病を理由に、寄港後に退職を願い出る。語り手は Ransome の必死の嘆願に動揺しつつも、最後にはその決断を受け入れることで、作品は幕を閉じる。以上のように、語り手が船長として指揮を発揮していくことと、彼が Ransome と信頼関係を構築していくことはパラレルな関係にある。だが、語り手が病人を抱えて航海するという難局を乗り越えて、船乗りとしての技量を示すと、その成長を支えた分身たる Ransome は下船するのである。このように語り手と Ransome との信頼関係が構築されてから後に揺らぐ様は、語り手が Burns とは当初馬が合わないが最後には彼を受け入れることとは、対比をなす。いわば、Ransome と Burns は、表裏一体の関係にあるのである。その当の Ransome との出会いと別れは、船長が自身の成長を彩る語りに、どのような作用をもたらしているのかを、本節は考察したい。

Ransome の表象で注目すべきは、語り手が Ransome と会うたびに、喜びを感じるという描写がたびたび描かれていることである。Ransome 自身は見栄えの良い人物である。語り手は初見時に、Ransome の外見を「遠くからでもわかる均整の取れた容姿で、その物腰には何か全く船員に典型的なものがある」(“Even at a distance his [Ransome’s] well-proportioned figure, something thoroughly sailor-like in his poise”)と描写している(55)。この整った容姿と身のこなしのためか、語り手は「ランサムを見ると嬉しい」(“It was a pleasure to look at him [Ransome].”)と述べるし(60)、「彼の声を聴くと極めて喜ばしい」(“His voice was extremely pleasant to listen to.”)と評する(88)。語り手自身は、初めての船長職、しかも部下の多くが熱病に倒れる中、責任感ゆえに悩んでいる。そのような困難の中ではなおさら、Ransome の実直な様子と仕事ぶりは、喜ばしくて頼れる存在であったことは疑いない。

だが語り手の苦難を考慮に入れても、彼は Ransome の視線と微笑に関して過剰にも思える頻度で言及する。例えば Ransome が語り手に船内の

熱病の感染拡大について話しかけると、[Ransome の眼にある何か] (“something in his [Ransome’s] eyes”) が語り手を呼び止める。二人の会話後には、Ransome の眼が語り手の眼をしっかりととらえる (“Ransome’s eyes gazed steadily into mine”)。その後、二人は微笑を交わすが (“We exchanged smiles”)、それはあたかも語り手が熱病やそれで苦しむ人がいることに密かに憤慨していることに、呼応しているかのようだという (“to correspond with my secret exasperation”) (64-65)。この後でも、二人が先代船長の埋葬を話した後では Ransome は「微かな微笑」 (“with a faint smile”) をたたえて部屋を去るし (68)、語り手が熱病になす術がないと悩むときに、Ransome は何とか “his pleasant, wistful smile” を語り手に向ける (78)。また、語り手が激務で寝不足のときに Ransome が起こしに来る際には、語り手は Ransome の顔や微笑や目を見ている (“look up at Ransome’s face, with its faint, wistful smile and friendly, grey eyes”) (81)。さらには、語り手たちが作品後半で夜中に苦労して操船する場面でも、彼は Ransome が微かに微笑する様子や (“a faint smile”)、その顔形や視線に微細なまでに言及する (“the clear, firm design of Ransome’s lips”; “With his [Ransome’s] serious clear, grey eyes”) (93)。上述の各例でわかるように、語り手は Ransome の様子、特に視線と微笑について、過剰なほど丁寧にかつ何度も描写し、両者の間の “non-verbal communication” は読者の目を引く (Hawthorn 52)。それらの過度な描写からは、語り手が Ransome を偶像化さえしていることが読み取れる。

このような子細な視線や外見描写に関しては、*The Shadow-Line* における視覚の表象と、そこから語り手が対象を理想化する姿が透けてみえることが重要である。Burns への分析の際に述べたように、語り手は船長職や自らの船のことを、おとぎ話の世界の存在だととらえている。彼が実際に乗船する直前に船体を見たときには、船からは「生命と人格があると思わせるような、最上の手仕事によって人を魅了させるようなもの」 (“That

illusion of life and character which charms one in men's finest handiwork”) がにじみ出ていると考える。ここで“illusion”や“charms”という言葉遣いで示されるように、語り手は船に過剰なまでの魅力を見出している。そのように視認した後で彼は乗船し(“putting my foot on her deck”)、そこでようやく「深い身体的な満足の感情」(“the feeling of deep physical satisfaction”)を感じている(41)。Jeremy Hawthorn が指摘するように、この場面では、視覚情報(Hawthorn が言う“observed”されたもの)やそれに起因するイメージが、実際に経験された実感よりも優先されている(133-35)⁴。この船や航路への理想化は、のちに風と熱病という現実によって碎かれることになる。

視覚と理想化との関係は、語り手から Ransome への接し方にも通じる。語り手は Ransome の実直な仕事ぶりを当てにし、現に種々の困難を乗り越えることができた。だが、船が風を受けて航路が順調になると、状況が変わってくる。語り手の食事中に Ransome は一時的に舵を握るが、その際に語り手は、自分や船が Ransome に多くを負っている(“very much indebted to you”)と謝意を述べる。だがそれに対して Ransome は、操舵への集中はあるにしても、まるで語り手の話を聞かないかのような(“as though he [Ransome] had not heard me”)素っ気ない対応をする(101)。この後 Ransome が心臓病ゆえに息切れするときにも、語り手は病への不安ゆえに彼から目をそらしてしまう(103)。一言で言えば、二人の間にすれ違いがあることが、暗示され始めるのである。

語り手と Ransome との齟齬は、Ransome が下船を懇願するときに最大値に達する。語り手はその申し出に驚いて彼を見つめ(“looked at him in surprise”)、Ransome は本気ではないだろうと叫ぶ(“cried out”)。しかし Ransome は、自分は病院に行かねばならないし、その権利がある(“I have a right!”)と息を飲みつつ、「粗野なほどに決意した様子」(“a look of almost savage determination”)でもって言い切る。ここにおいてようやく、

語り手の視認と Ransome の実情 (“the humble reality of things”) とが、合致するのである (105-06; my italics)。その後、語り手が彼の下船を受け入れると、Ransome は再び “with a smile and in his natural pleasant voice” でもって、残りの職務に理解を示す (106; my italics)。Ransome はこれまでも語り手に微笑を向けて快い声で話しかけてはいた。だが、彼の微笑は、Burns が劇的かつ激情的な “laughter” をしたことと対比的に、自身の感情を隠すための所作なのだとここでわかる。しかも Hawthorne の指摘する通り (52)、Ransome が語り手と最後の別れをするときには、彼の眼は語り手を捉えさえしない (“His [Ransome’s] eyes, not looking at me”) (109) ⁵。

以上のように視認とそれゆえの偶像化・理想化という観点を考えてみれば、語り手と Ransome との分身関係もそう単純なものではないということが意味づけられる。そもそも Ransome は、料理人という船のヒエラルキーでは決して高くない立場の人物であり、なおかつ心臓に不安を抱えている。いわば語り手は、地位的にも身体的にも自分とは乖離のある人物に頼り切っていて、その一方で一等航海士である Burns とは不協和音を奏でている。このような語り手を通じた三者間のねじれた分身関係に、語り手の齟齬が見出せるのである。

3. Giles との関係

上述のように分身関係から見える語り手の視点の限界を考えると、*The Shadow-Line* は、Conrad の船員経験に基づく素朴な成長物語であるとは、決して言えない。しかし本小説の分身関係を考えるに当たり、Burns や Ransome ほどの登場頻度は無いが、もう一人重要な人物として Giles 船長がいる。Giles はいわばフリーランスの経験豊かな船長で、語り手が船長になれたのも彼の助言のおかげである。語り手と Giles は、船を渡り歩くという点や船長であるという点では、共通している。だが、Giles には船員経験の深さや年齢ゆえの落ち着きがあることから、一見したところ

二人は分身とは見えがたい。それどころか、語り手が前の船をやめた理由を Giles が尋ねる場面では、語り手は突如として怒り、「この道德家を黙らせるべきだ」(“I ought to shut up that moralist”) とさえ理不尽に考える (13)。語り手は Giles を「人柄と業績が人々に認められた人物」(“a man of recognised character and achievement”) だと認めつつも (19)、彼の言動には「自己満足」(“self-complacency”) があるとして毛嫌いする (23)。

だが語り手から Giles への嫌悪感が揺らぎ、なおかつ Giles 自身も語り手への評価を変える場面が、小説後半に現れる。しかし、まさにその場面こそが、語り手の成長へ疑念が残る瞬間にもなっているのである。語り手の船が寄港した後で、Giles は語り手を出迎える。当初 Giles は『『親切なおじさん』の微笑』(“with a ‘kind uncle’ *smile*”) を携えて、語り手の労を労う。だが、語り手が『『自分は疲れてはいないが、年を重ねたように感じる』』(“Not tired. But I’ll tell you, Captain Giles, how I feel. I feel old”) と述べる。Giles は語り手の変化を真剣に受け取ったのか、微笑をやめて (“He didn’t *smile*.”)、語り手の話に神妙に聞き入る (107-08; *my italics*)。その後語り手は、航路を遅らせるわけにはいかないという責任から、休むことなくすぐに航海を続行せねばならないと Giles に告げる。Giles は語り手に同意するが、その際の様子に「あたかも重々しいカーテンが巻き上げられて、予期せぬ Giles 船長の姿が明かされたかのよう」(“as if a ponderous curtain had rolled up disclosing an unexpected Captain Giles”) だという (109)。Ransome の分析で見たように、本小説では微笑というものは、感情の表出を抑制し、ときに真意を糊塗する役割さえ果たす。Giles は、「カーテン」を取り払い、飾り気なしに語り手と向き合う。Giles の真摯な様子は、以前のパターンナリスティックな態度を捨てて、語り手を自分と同じ一角の船長と認めたことをにおわせる。ここにおいて、二人とも船長として一定以上の技量を持つこと、すなわち「分身」であることが、読み解ける。なおかつ、その様子に気づけるほど、主人公には人格的に変化が

あることも示されるのである。

だが Giles が語り手の技量を認めて、なおかつ語り手も生身の Giles と向き合う瞬間がありつつも、語り手が成長しきったのかどうかに関しては疑念が残る。Giles が微笑をやめた後も、語り手は彼に対して不遜な態度を取り続けるのである。語り手が自分は年をとったと感じると強調した後、Giles は「『人は人生に起こることを、良いことにしろ悪いことにしろ、過度に重んじ過ぎてはいけない』」（“The truth is that one must not make too much of anything in life, good or bad.”）とたしなめるように述べる。しかし語り手は自身の性急さが批判されたと感じたのか、「『半分の速度で生きろということですか』」（“Live at half-speed”）と述べるという形で、「ひねくれて」（“perversely”）反応する。そのように Giles がたしなめるように話し続けた後、「『君は臆病者ではないだろう』」（“you aren't faint-hearted?”）と語り手に尋ねる。ところが、語り手は「『神のみぞ知るです、Giles 船長』」（“God only knows, Captain Giles”）と「誠実に」答える（“my sincere answer”）のである（108）。このような語り手の性急さや不遜ぶりを見ると、彼が若さと成熟を分ける「シャドウ・ライン」（“a shadow-line”）（3）を超えられたのかは、怪しくなる（Manocha 196-97）。確かに、船長職がもたらす成熟という観点で言えば、語り手と Giles には重なる部分もあるが、むしろその重なりゆえに、語り手の「成長」にほころびが見えるのである。

結論

以上のように、本稿は語り手が Burns、Ransome、Giles の各三者と織りなす分身関係に注目することで、*The Shadow-Line* の語りの戦略を考察した。分身という点では、本小説と双子のような関係にある“The Secret Sharer”を含めて、Conrad 作品では初期から中期の作品が重視されてきた。だが、*The Shadow-Line* という、内容面でも語りの構造でも一見シ

ンプルな物語言説においても、分身は見逃せないと考えられる。

近年は、Conrad 後期作品においては、語りの技法などのテキストの面でも、ジェンダーなどのコンテキストの面でも、再考察が試みられている。その流れの下で、*The Shadow-Line* もまた、古くは Leavis たちが述べたような、素朴な成長物語ではないと評価されつつある。その再評価のためにも、なおかつ彼の他作品とリンクさせるためにも、本小説の分身関係は深掘りされてしかるべきである。このことは、*The Shadow-Line* は単に作者の経験に基づくという伝記的な面ではすくいきれない、Conrad の筆の巧みさを探ることにもなる。後期作品の一見したとっつきやすさや、それゆえに才能衰退があるというレッテルの裏に、絶えず自己変革を試みていた彼の姿が見えてくる。そこからは、前期・中期の重々しい作風に注視してばかりでは見えてこない、Conrad 作品の多元性や軽やかささえ見いだせる。ひいては、Conrad に寄せられがちなモダニズム文学の重鎮であるといった文学史上の立ち位置の見直しや、彼がそれらの文学に寄与した貢献への再考にも、つながると考えられるのである。

Notes

1. たとえば英国コンラッド協会の重鎮である Robert Hampson は、2020 年に Conrad の生涯と批評史を手際よくまとめた伝記 *Joseph Conrad* を出版している。その中でも、後期作品へはかなりの紙面が割かれていて、大家たちが Conrad 作品を彼のミソジニーの現れとみなしたことなどへの修正が試みられている。
2. たとえば F. R. Leavis はこの作品は“comes out of experience that was intimately and urgently personal”(99) だと述べている。加えて、Conrad 自身が手紙やこの作品の“Author's Note”において、個人的経験を反映させたと強調していることも、たびたび着目されている (Simmons 198; Watt 498)。
3. *The Shadow-Line* における時間表象と語りの戦略との関係については、*Osaka Literary Review* の前号 (2020 年第 59 号) に、拙稿が掲載されている。
4. 船は英語では女性としてみなされることや、語り手が冒頭で「この話は“a marriage story”ではない」と述べていることを踏まえて (3-4)、Hawthorne はこの船の描写は“the captain's symbolic sexual consummation with his ship bride”を体現している

と考えている (133)。

5. Hawthorn は、語り手と Ransome との非言語的なやり取りに、ホモソーシャルな関係を読み込んでいる (52-53)。この点を踏まえると、いわば *The Shadow-Line* は語り手が男性同士の絆から船＝女性への関係に移行する姿を描いているとも言える。この移行ぶりは、Cesare Casarino が“The Secret Sharer”、つまり *The Shadow-Line* の「双子」の作品で、語り手が Leggatt という分身から船へと重きを移す様子を主張したことと通じる (240-41)。

Works Cited

- Capoferro, Riccardo. “Providence, Anti-Providence, and the Experience of Time in *The Shadow-Line*.” *Conradiana*, vol. 47, no. 1, 2015, pp. 17-41.
- Casarino, Cesare. “The Sublime of the Closet; Or, Joseph Conrad’s Secret Sharing.” *Boundary 2*, vol. 24, no. 2, 1997, pp. 199-243.
- Conrad, Joseph. *The Shadow-Line: A Confession*. 1917. Edited with an introduction and notes by Jeremy Hawthorn, Oxford World’s Classics, revised ed., Oxford UP, 2003.
- Erdinast-Vulcan, Daphna. *Joseph Conrad and the Modern Temper*. Clarendon Press, 1991.
- Guerard, Albert J. *Conrad the Novelist*. 1958. Atheneum, 1967.
- Hamspon, Robert. *Joseph Conrad*. Reaktion Books, 2020. Critical Lives.
- Hawthorn, Jeremy. *Sexuality and the Erotic in the Fiction of Joseph Conrad*. Continuum, 2007.
- Lawtoo, Nidesh. *Conrad’s Shadow: Catastrophe, Mimesis, Theory*. Michigan State UP, 2016.
- Leavis, F. R. “*The Shadow-Line*.” *Anna Karenina and Other Essays*, Chatto and Windus, 1973, pp. 92-110. This paper is first published under the title “Joseph Conrad” in *Seawanee Review*, vol. 66, no. 2, 1958, pp. 179-200.
- Manocha, Nisha. “Reading Documents: Embedded Texts in *The Professor’s House* and *The Shadow-Line*.” *Studies in the Novel*, vol. 44, no. 22, Summer, 2012, pp. 186-207.
- Simmons, Allan H. *Joseph Conrad*. Palgrave Macmillan, 2006.
- Tanaka, Kazuya. “‘I Am No Longer a Youngster’: Representation of Time as a Narrative Device in Joseph Conrad’s *The Shadow-Line*.” *Osaka Literary Review*, no. 59, 2021, pp. 17-30.
- Thomas, Mark Ellis. “Doubling and Difference in Conrad: ‘The Secret Sharer,’ *Lord Jim*, and *The Shadow-Line*.” *Conradiana*, vol. 27, no. 3, 1995, pp. 222-34.
- Watt, Ian. “Story and Idea in Conrad’s *The Shadow-Line*.” *Joseph Conrad: Critical Assessments*, edited by Keith Carabine, Vol. 3, Helm Information, pp. 497-512. Originally published in *Critical Quarterly*, vol. 2, Summer, 1960, pp. 133-48.

山本薫。『「自己」の向こうへーコンラッド中・短編小説を読むー』。大学教育出版、2012年。